2010年8月1日　アクセス　（1976年11月10日第三種郵便物認可）　第403号

地方小出版 情報誌 アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円（本体143円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター　〒162-0836　東京都新宿区南町20
編集　アクセス編集委員会　TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

「名タイ昭和文庫」刊行に至るまで

樹林舎　シリーズ第1巻は『名古屋城再建』

文・山田 恭幹

左から『名古屋今昔写真集』『名古屋城再建 - 鉄筋の城に託した希望 -』『名古屋情熱時代』

小社・樹林舎ではこの春、「名タイ昭和文庫」を起ち上げた。B5判、一部カラー、価格は1600円程度。「名古屋城」「テレビ塔」「名古屋駅」など地元ネタを中心に、十冊程度の刊行を予定している。これは、一昨年（平成二十年）休刊となった名古屋の夕刊紙・名古屋タイムズ（通称＝名タイ）の残した写真、記事を利用して昭和という時代をふり返る、というシリーズである。

ここでは、その発刊に至る経緯を、簡単にご紹介する。

▽

名古屋市は人口200万人、日本有数の大都市だが、出版社の数はさほど多くない。樹林舎は、名古屋市のはずれでマンションの一室に間借りする出版社である。

地域に関する良書をつくり、その地域の人に買ってもらうことを理想として7年続けてきたが、その道のりは多難だった。

あるとき、名タイの記者と名乗る数人が、会社を訪ねてきた。昭和20年代に創刊された名タイは、名古屋では名門の新聞社であった。彼らの話は「まだ、余り表沙汰には出来ないが、会社が危なくなったので相談に乗って欲しい」というものだった。

これ以上社員を増やす余裕はなく、困ったなという私の杞憂をよそに、彼らは意外なことを言った。

「このままでは会社とともに、今までの新聞の著作物が散逸してしまう。そうなれば記事や写真、資料、本紙のバックナンバーなど、場合によっては二束三文で売却されてしまうかもしれない。自分や先輩たちが長年かけて築いてきた仕事が、そんなふうに消えてしまうのは寂しい」。さらに「有志を集めて自分たちで買い取り、管理することを考えている。ただ膨大な資料を置く場所がない。協力してもらえないか」というのであった。

この考えは立派だと思ったので、協力はしたかったが、それを買い取るだけの資力も、膨大な量の写真や資料を適切に保存する場所もなかった。また私としては、そうした著作物を有効に活かすことに拘るより、なるべく高く売り払って負債を減らしスムースに会社をたたむ方が、より現実的に思えたのである。

無理してでも本を出したいと思う一方で、一発当てさえすれば、すべて売り払って自由になりたい、という夢はいつも頭の片隅にある。

そこで私は提案した。

「その写真を使って本を出しましょう。その収入を資料の買い取りなり、管理代に当てたらいいでしょう」

小社では、古い写真を集めて名古屋、京都、奈良など土地ごとのなつかしい風景を見せる『今昔写真集』というシリーズを出している。これはその土地の昔の写真を発掘する作業が大変で、公共機関や旧家、老舗商店をまわって押し入れの隅に眠っているアルバムを見せてもらうなど、時間と労力のかかる取材を必要とする。部数が出てもなかなか黒字にするのが難しい企画であった。

しかし、この新聞社は、この50年間、名古屋周辺の庶民の出来事や変貌する街並みを取り続けている。それを使えば取材費がまるまる浮く。その利益を折半すればお互いにとっていい話だと思った。ただし本が売れれば、である。私たちは第1冊目『名古屋情熱時代』を出版したが、結果的には売れなかった。

もし完売、二刷り、重版などということになれば続編を出し、シリーズ化

も予定していた。しかし1冊目が返本の山となり、しばらく様子を見ることにした。京都や奈良、大阪など遠隔地で『今昔写真集』を出してしのいでいるうちに、地元名古屋の書店から「オタクはもう名古屋の本を出さないのか？」という声をチラホラ聞くようになった。名タイ・アーカイブス委員会という肩書きを得て、それぞれ転職後も休日返上で写真や記事の整理をしている元記者たちからも「2冊目は、やはり無理ですか」と暗に陽に迫られた。

あまり売れないかもしれないが、出してみよう、ということで出版を決めた。あまりにも売れなければ撤退する、とも考えた。

こうしてシリーズ化なった名タイ昭和文庫の第1巻は『名古屋城再建』である。空襲で焼け落ちた城の再建を追った当時の連載記事「名城再建日誌」の文と写真をもとに、工事の一部始終とそれにまつわる行政の動き、市民の反響を一冊にまとめた。

この本でこだわったテーマは「近代ビルとしての名古屋城」である。名古屋城は鉄とコンクリートとガラスでできている。歴史ブームといわれ城郭マニアも増えている昨今だが、彼らの連想するのは土と紙と木でできた城である。また開府400年を記念して御殿の木造再建事業が進む名古屋では、市長の河村たかし氏も「名古屋城も木造で造り直せば、世界中から観光客が呼べる」と発言して話題になった。自治体が町おこしのために再現した白亜の天守閣は日本各地に散在するが、歴史考証の点でも評判はよくない。

しかし昭和30年代の名タイの記事を見ると「コンクリート打ちは超突貫作業！」「モルタル注入で仕上げに突入！」「拍手の中、クレーンで高だかと！」等々、再建工事の進捗に一喜一憂する市民の熱気が肌に伝わってくる。資金が不足すると県と市が「懇請班」を組織して地元の有力企業に50万円以上の募金をお願いする様子も勇ましい。昨今なら、安易なハコモノ行政が丸投げした巨大公共事業、相手は談合体質に肥満したゼネコン、と皮肉られそうなところだが、それほど感覚の相違がある。

やはりいい時代だったのだ。

同書は、発刊から2カ月を経たいま、印刷費と著作権料は払えそうな売れ行きで、現在2冊目の『大須（おおす）』を編集中である。今後、できるところまで出し続けたいと考えている。

（やまだ　やすき／樹林舎編集長）

新刊ダイジェスト

※価格は総額（税込）表示です。

『環境問題のデパート中国』●小柳　秀明著

30年余に亘って平均10％もの経済成長を続ける中国の姿は、想像を絶するものがある。だがその裏には、あらゆる種類のスケールの大きな環境問題を引きずっている。著者は日中友好環境保全センターアドバイザー、地球環境戦略研究機関北京事務所長として、長年この問題に取組んできた。その経験を踏まえ、今中国で起きている大気、水質、海洋、土壌の各汚染、廃棄物汚染、生体環境等の実態と、法的整備、環境政策、省エネ・排出削減などの対策、気候変動問題への対応を詳細にレポートすると共に、日本の役割にも言及し、この問題への冷静な理解と対処を求めている。巻末に、日中環境保護協力関係資料を付す。

◆2730円・A5判・326頁・**蒼蒼社**・東京・2010/4刊・ISBN978-4-88360-089-2

『宮崎駿の地平　ー広場の孤独・照葉樹林・アニミズム／叢書レスプリ・ヌウボオ18』●野村　幸一郎著

数々の長編アニメーションを世の送り出している宮崎駿の作品に込められたメッセージを、「風のナウシカ」や「もののけ姫」等を例にとって明らかにする。これら一連のアニメ作品の土台となっている、人が自然と共生するとはどういうことか。堀田善衛（文学）、中尾佐助（農学）、藤森栄一（考古学）、柳田國男（民俗学）、山折哲雄（宗教学）等の理論を参考にして、人が自然とともにあった縄文時代の森の文化、すなわち縄文人の照葉樹林文化と、弥生時代以降の水田稲作やタタラ製鉄の開発文化を対比させて話を進める。その際の有効な考え方として、日本人の自然観の中心的な概念であるアニミズムの本質にも触れる。

◆2100円・四六判・235頁・**白地社**・京都・2010/4刊・ISBN978-4-89359-103-6

『ミーツへの道　ー「街的雑誌」の時代』●江　弘毅著

『ミーツ・リージョナル』は神戸大阪京都を中心とした伝説的な情報誌。一情報誌でありながら、「街場」と「ひと」への徹底的なこだわりによる強烈なメッセージ性が、データ提供中心の情報誌とは全くちがう個性をうみ熱烈な支持を受ける。

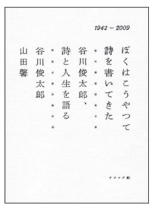
著者は雑誌立ち上げの89年から16年間スタッフや読者と作り上げてきた名物編集長。バブル、阪神淡路大震災、東京からの情報誌進出、不況…。日本が激動し価値観が変化したこの時期、常に「ひと」のいる「街場」に興味を持ち、匿名でなく自分の目と耳と声で情報発信した『ミーツ』。京阪神のサブカルチャー史としても興味深く、著者の熱に当てられっぱなしの、濃厚な、文句なしに面白い一冊。

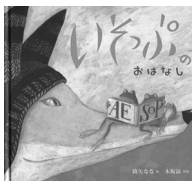
◆1680円・四六判・253頁・**本の雑誌社**・東京・2010/6刊・ISBN978-4-86011-205-9

売行良好書　期間：2010年6月16日〜7月15日

［出荷センター扱い］※税込み価格

(1)『いぬのおまわりさん』1470円・不知火書房　(2)『おうちで　梅しごと』500円・ベターホーム出版局　(3)『ぼくはこうやって詩を書いてきた』2940円・ナナロク社　(4)『イタリアの街角から』2205円・弦書房　(5)『いそっぷの　おはなし』1680円・グランまま社　(6)『陽炎の飛鳥』1785円・アートヴィレッジ　(7)『赤トンボのすべて』3780円・トンボ出版　(8)『昭和の仕事』1995円・弦書房　(9)『自閉症の子どもたちの生活を支える』1575円・筒井書房　(10)『なせば成る！』840円・山形大学出版会　(11)『アイヌ民族もんよう集』3000円・かりん舎　(12)『はじめての秋田弁』1050円・無明舎出版　(13)『機能不全家族』1600円・アートヴィレッジ





［三省堂書店神保町本店４Ｆ―センター扱い図書］※税込み価格

(1)『東京かわら版　７月号』420円・東京かわら版　(2)『円周率100万桁表』330円・暗黒通信団　(3)『フリースタイル　12』932円・フリースタイル　(4)『砂上の同盟』1260円・沖縄タイムス社　(5)『はじめての秋田弁』1050円・無明舎出版　(6)『キュッと曲がって90°！関西オノマトペ用例集』890円・組立通信　(7)『家で作れる海軍めし2』420円・出版評論社　(8)『日吉山王祭』2520円・サンライズ出版　(9)『兵たちの登場』2625円・高志書院　(10)『武蔵大石氏』2940円・岩田書院

［ジュンク堂書店新宿店―センター扱い図書］※センター出荷データより／税込み価格

(1)『はじめての秋田弁』1050円・無明舎出版　(2)『円周率1,000,000桁表』330円・暗黒通信団　(3)『イタリアの街角から』2205円・弦書房　(4)『ぐるぐる台北』1365円・書肆侃侃房　(5)『ぼくはこうやって詩を書いてきた』2940円・ナナロク社　(6)『外地探偵小説集　南方篇』2520円・せらび書房　(7)『ゆくる』1500円・編集工房東洋企画　(8)『photographers' gallery press　ｎｏ．９』2520円・Ｒｉｃｏｃｈｅｔ（リコシェ）　(9)『油症は病気のデパート』840円・アットワークス　(10)『謙虚に生きる』1050円・どう出版

以下ホームページでも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
http://www.bekkoame.ne.jp/~much/

トピックス ―― ★★★

▼　妖怪特集の背景は

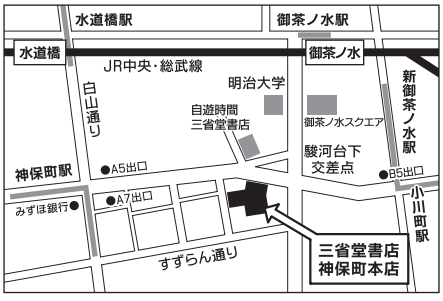
普段は紙芝居や保育といった特集が目立つ真面目な印象の教育雑誌「子どもの文化」ですが、６月号の特集は珍しく「妖怪ニッポン」(305円)。今回の特集は、目白にある子どもの文化研究所を会場に開かれたシンポジウム「妖怪文化の伝統と現代　―中世の絵巻から現代のマンガ・映画まで」をもとに企画されたのだとか。「妖怪マンガは世につれ世は妖怪マンガにつれ」「妖怪を研究すること」「妖怪と不登校は妙に因縁深い」と、おもしろい論文・エッセイが載っていますが、このなかで気になったのが、佐々木高弘京都学園大学教授による「子どもの見る怪異の風景」で取り上げられている「くねくね」という妖怪のこと。この「くねくね」、近頃ネット上で話題になっているのだそうで、試しに検索してみると確かにリアリティをもった目撃談の数々がヒットしました。

日本折紙協会の月刊「おりがみ」８月号(765円)も折り紙で作られた傘化けや一つ目の妖怪たちが表紙を飾っています。中に載っているゲゲゲの鬼太郎や目玉おやじの折り方も見逃せません。例年８月号の表紙と言えば蝉や向日葵といった季節の風物だったと思いますが、「子どもの文化」といいこの「おりがみ」といい、やはりNHKの連続テレビ小説『ゲゲゲの女房』人気と関係があるのか。最近刊行された島根のハーベスト出版『水木しげるロード熱闘記　―妖怪によるまちづくり　境港市観光協会の挑戦』(1365円)もこの文脈上に置くことができるでしょうか。

郵便販売のご注文方法

◎お名前、お届け先（郵便番号、住所）、連絡先お電話番号、ご注文品の書誌名、冊数の必要事項を明記のうえ、下記までＦＡＸでご連絡ください。
◎送料は、冊子小包・メール便共実費でお送りさせて頂きます。基本的にメール便は、一冊２１０円でお送り致します。（メール便の到着は、発送してから３〜４日かかります。）お急ぎの方、その他ご要望がございます場合はお気軽に下記までお問い合せ下さいませ。
◎なお書籍お買上総計（税抜き価格）が5,000円以上の場合は、送料をサービスさせて頂きます。

★地方・小出版流通センター
ＦＡＸ：０３−３２３５−６１８２

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

三省堂書店　営業のごあんない
BOOKS SANSEIDO
神保町本店　４階
地方出版・小出版物フロア
営業時間　10：00 AM〜8：00 PM
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
TEL. 03-3233-3312(代)
URL. http://www.books-sanseido.co.jp
本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。